
リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

黒ぶりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

【Zコード】

Z0844BA

【作者名】

黒ふりん

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に転生しました。
しかし転生した場所は物語に関わりの無い砂漠が広がる世界でした。

プロローグ

人生とは何が起こるか解らない。

例えば学校に遅刻しそうになりパンをくわえて走っていたら美少女やイケメンにぶつかり言い争いになりそいつは実は転校生でしたとか、そんなキャツキヤウフフなコテコテの恋愛ゲームのテンプレ人生になるかもしない。

またはいきなり異世界に放り込まれて、落ちた先に美少女またはイケメンが居てそいつと共に魔王を倒す旅に出るついでにキャツキヤウフフするという人生も……

しかしながらそれには落とし穴があり、イケメンや美少女でなれば物語が始まらないという罠も存在しているのだ。

ちなみに俺はどこにでも居そうな普通の顔立ちでやや陰気なイメージがつきまとっている。

まあ転生という奥の手もあるが、俺みたいな人種は残念な事にヒロインとかとキャツキヤウフフできない

せいぜいモブキャラが限界だな。

目立つと死ぬ。

……先ほどから何が言いたいのかと言つて、どうやら俺は死んだようだ。

死んだ事によるショックは無かつたが、突然の事でテンパつてるのでとりあえず現実逃避しているのである。

「そろそろ戻いか？」

あ、どうぞ。

現実逃避から戻ると目の前に少年が居てニヤニヤしながら「寧に死因を教えてくれた。

どうやらこのガキンチョが神様のようだ。

ちなみに死因は、「ゴキブリに驚いての心臓マヒを起こしたと、我ながら情けない死に方である。
しかしネタにはなるな。

天国とかで、あー！ゴキブリに驚いて死んだ人だーって美少女天使に言われたり……止めよう、なんか涙が出てきた。

「暇つぶしで殺した

転生させてやるから俺を楽しません」

よくある一次創作みたいに謝らないんだな。

まあ、よく考えてみると当たり前の事だ、何千何億という生命体の1個体でしかない俺を気にかける事は無い。

ん……？

つーか、何言ったこの神様？

「えーと、つまり貴方のミスでは無く暇つぶしで俺は殺されたと？」

「物分かりが悪いな、さつき言つただろ？
さつさと転生しろ」

……なんだこの神様、俺をゲームの駒としか考えて無いのか？

ていうか特典とか無いの？

「ああ、ちなみに特典は死ぬ前に見ていたアニメや漫画の能力や装備だ
サービスで魔力もくれてやる」

死ぬ前つーと……砂ぼつずの漫画を読みながらガンソードのDVD見ていたっけ。

つーか思考読めるんだ流石神様。

「お前……器用だな」

「いや、アニメは垂れ流しですよ」

「まあ良いか、それで転生しろ
んで楽しませり

物語が終わつたら好きにして良いござ」

説明は終わりだと言い神が親指をビシッヒトに向けると足元が無くな
り俺は自由落下を始める。

驚きのあまり声を出せずに落ちる俺

転生する世界とか場所とか他の転生者とか色々聞きたい事があつた
のだが残念ながら視界が暗転して意識が朦朧となつた。

あ……容姿どうですか？

できれば童帝か鬼いさんを希望したいのですが……

「OK判った、砂ぼうずメインでいくわ
神様なんて居なかつた。

プロローグ（後書き）

ついやってしまった後悔はしていない

転生したからといって主人公と絡むとか夢物語

転生といつも体験は初めてでどうなる事かと心配だったが、特に障害も無く五体満足で転生できた。

とはいえ赤ん坊の頃の記憶はほとんど無く、気が付いたらいつの間にやら転生していたといつのが正しい表現かもしない。

一つ残念だった事は母親のふくよかな胸団に吸い尽したりさわったりする記憶が無い事だな。

別に俺は鬼畜や畜生では無いので実の母親に欲情はしない。

いや、肉親だとしても巨大な山脈があれば一回くらいは揉むのが自然の摺理というものだ。

うん、俺は悪くないな、悪いのは豊かな果実を口にした母親とこんな思考をするようになつた俺だ。

……悪かった、どうやら俺が間違つていたようだ今のは忘れてくれ。

まあダラダラとここまで思い起こしたのだが、問題はどのような世界に転生したのかが重要な事だったな。

俺が転生した世界は魔法と科学が融合した世界、リリカルでマジカルなアレの生活だ。

原作知識は殆ど無い……といふか記憶が欠落しているようで前世の記憶がほとんど無い。

デバイス、管理局、魔法生物などのキーワードで何となくだがリリカルなのはの世界だなど理解できた。

……やっぱ前世はそっち方面の人間だったのか？

【……来たぞ】

おっと、獲物が来たようだ。

話は中断するが、現在狩りの最中だつたりする。

幸運な事にリンカーコアがあつたので念話ができるし魔法も使える。
といつも使えない生きていけない世界だつたりする。

ちなみに俺のポジションは、砂に潜つて待ち伏せからの奇襲がメイン。

獲物が来たら、魔力弾をぶち込む簡単なお仕事です。

……嘘だ、実は初めて正面担当になりました。

そんな無駄な思考を巡らせていると俺が潜つている所まで影が差した。

スコープ出して確認すると巨大なトカゲの化け物がゆっくりと近付いてくるのが見える。

獲物が一步を踏み出すたびに地響きで俺の身体をビリビリと撫でる。
いや、俺が震えているのか？
指がじんわりと痺れて鼓動が早くなつてくる。

ヤバいな、俺ブルつてる。

【おー、しくじるなよ？

久しぶりの獲物だ、そろそろ肉が食いたいんだよ】

俺が返事をしない事を不振に思つたのか仲間の一人が喋りかけてきた。

といつかイライラしていた。

失敗したら俺が食われる物理的な意味で。

【りよつ了解】

俺は怖気付いた心に喝を入れ深呼吸、そして獲物の位置を確認する。

距離10メートルって所か、そろそろ仕掛けた方が良いな。

【三秒後に仕掛ける】

【モード一ねー】マサジ、マサジ

わかってるつづーの！俺だつてハラペコだ。

[3]

先ずは背中のウインチに魔力を込め

[2]

愛用している「テバイスのグリップ」を握りしめ

1

身体に力を込める

【.....0-!-】

俺は砂から勢い良く飛び出した。

「砂漠の神と今日の獲物に感謝を込め、乾杯！」

『乾杯！』

リーダーの声と共にガラスがぶつかり合つ音が響き、宴が始まる。

結論から言つと狩りは成功して、俺達は飯にありつけた。

俺が放つた魔力弾は獲物の足に命中し獲物が転び、仲間達が魔力弾の雨を振らせて終了。

ジユージューと肉汁滴る良い焼き肉になり俺の腹を満たす。

「よお～クー坊、お手柄だったなあ～！」

髭面の熊ようにデカい酔っ払いが絡んできた。

「ちょ！重い！

ゲンさんそのク一坊つての止めてくれよゲンさん！」

この酔っ払いの髭面はゲンさんと書いて、俺の師匠にあたる人物だ。俺が活躍したのが嬉しいのか豊かな髭をこすりつけてくる。

……チクチクしていくすぐったい酒臭い重い、やたらとスキンシップが激しいので実はこの人そつち方面の人なのではと思つてしまつ。まあただ単に息子のように接してくれているだけだと思つが……いや、思いたい。

「ガツハツハ！

俺は嬉しいぞーーー！」

別の意味でくすぐつたくなつてきた。

つーかク一坊はやめてくれ恥ずかしいたぶん止めないと思つナビ。

「ゲンさんが教えてくれたからだよ」

「嬉しい事言つてくれるじゃねーか！
よし、ここは俺の感動の舞を披露せねば……ー」

ゲンさんは更に機嫌が良くなつたのかそのままのテンションで踊りだした。

それに釣られて他の酔っ払いも踊りだす。

「なにこの力オス……」

原因は俺なんだが、とりあえず酔っ払いは放置して、冒頭の話の続きをでもするか……

……俺が転生したのは砂漠が広がる世界だった。

この世界では水やら植物が無く、変わりに魔法生物と言われる生き物が生息していて、水や食料はその魔法生物を狩る事で獲ることができる。

ちなみに、その魔法生物を狩る事を生業としたのが、俺たち狩獵民族だ。

で、肝心のデバイスだが、驚いた事に独自改良されたデバイスだった。

待機形態は大きなリュックサックで、寝袋やら生活必需品が入っている。

バリアジャケットを展開するとまんま砂ぼうずになる。

砂ぼうずがわからない?ググれ。

とりあえず簡単に装備を説明すると各種センサー やスコープが内臓された金魚鉢みたいなヘルメットに日傘を被せて、野戦服を着込み背中にはワイヤー式のロケットウインチを背負い、魔力弾やダメージを数回発防げるマントを羽織っている。

……このマント某海賊ガンダムのABCマントじゃね?

ん？ABCマントって何だ？前世の記憶か？

なんか強化フラグとかあるのかね？

ちなみに他の仲間も同様の装備で、並んで歩くと実にシユールである。

手持ち武器はそれぞれ違っていて、俺の場合はショットガンだった。
おそらく原作意識だと思う。

機能については追々だな。

田下の問題は俺が何時の時期に転生したのか、そして半裸で突進していくるゲンさんにどう接したら良いのかという事だ。

まあ前者は原作自体もほとんど覚えていないし別次元なので、介入は無理じやね的な流れになつていてるがな。

後者はもう泣きたくなつてくる。

つーかこつち来んな！

ともかく比較的平和な世界に転生できて良かったよ。
今は地味にピンチだけどね、主に尻が。

転生したからといって主人公と絡むとか夢物語（後書き）

筆者の知識もほとんど無いので、色々調べていますがなかなか上手く書けません

獲物を探していたら襲われている金髪を見つけた

俺達狩猟民族の朝は早い

日が昇る前に装備を整え外出する。

まあ寝袋畳んでリュックを背負うだけなんだけどね。

ちなみに俺達が住んでいるのは山場にある洞穴だ。

外敵から身を守るというのもあるが、涼しいんだよね」。

普段は日が昇つてから起きるんだけど、今日は見回りの山番なんだ。

おやっ、ここに居る熊みたいにデカい男は……

「おはようゲンさん」

「おお、ク一坊！」

やつぱりゲンさんだつた。

ところがク一坊やめてくれと……まあ言つても無駄だから諦めた。

今田はゲンさんと一緒に見回りかな？

「今日はゲンさんと一緒に見回りだっけ？」

「いや、今日はク一坊一人で見回りだ

俺は西方面を見てくるからお前は東担当な」

この前の狩りで認められたのか、最近一人行動が多くなってきたな。
しかし東方面か……

「東かー、あそこ地面が少ないから移動が辛いんだけど」

「俺に似てウインチの使い方は下手くそだしなまあ、これも経験だ」

クツクツと意地の悪い笑いを漏らしながらゲンさんはバリアジャケットを着込み崖から飛び降り砂に飛び込んだ。

「……ゲンさん、あんた面倒なだけでしょ？」

幸せが逃げそなぐらいため息を吐いて、俺は東方面へと歩きだす。今更だが、俺たち狩猟民族は砂や地面に潜れる事ができるんだ。まあ一種のレアスキルみたいなもんだ。移動も非常に楽で、魚のように砂や地面の中を泳ぐ事ができる。

……欠点は砂にしか潜れないという事だ。ちなみにゲンさんが向かった西方面は砂漠が多く能力を使っての移動には最適である。見回りもほとんどバイス任せなので往復だけで良い。

「……グチグチ考えても仕方がないな」

俺もバリアジャケットを開いて、背中のロケットウインチに魔力を込める。

ゲンさんも言つていたが俺はあまりウインチ……というより魔力の制御が上手くできない。

練習は毎日しているがどうも……つーか、教えてくれるのが制御が得意じゃないゲンさんだしなー

まあともかく射出だ射出

背中からワイヤーに取り付けられたフックが勢い良く飛び出し十メートルくらいで魔方陣を展開、空中で固定。

「せぐい！」

ワイヤーを巻き戻す力で空中に身体を投げ出す。

「ヒヤッホー！」

そのままターザンよろしく巧みにワインチを操作して空中を進んだ

「……ら、本当に良かつたんだけどねー」

何回かは成功したのだが、射出のタイミングを失敗して今はテクテク岩場を歩いています。

……言い訳じゃねーし、襲われたら嫌だから魔力温存するんだし
仮に襲われたとしても俺は逃げる、誰かが襲われたら考えるがな。

「さつより早く轟音と悲鳴が聞こえてきた。

「どうやら隣にある巨大な山の向こう側から聞こえてるようだ

「……ッチ」

糞がつ……

美少女じゃなかつたら助けねーぞ……

ウインチに魔力を込め射出、一気に上空へ舞い上がり山の向こう側を確認する。

そこにはアルマジロみたいな魔法生物に襲われている金髪の……

「……あれ? 男? 女? どうち?」

糞がつ……

助けて確認しないと駄目とか……なんだよアイツ。

管理局の魔道師か?

「おじそこの金髪ー助けてやるから助け貸なー」

「ええー?」

「どうー?」

金髪の返事は聞かず、銃をアルマジロに向けて発砲。散弾型の魔力弾がアルマジロを襲い、小規模な爆発が起こる。

アルマジロが怯んだ隙にフックの固定を解除、地面に降りる。目の前には金髪、……なんだ男か。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

悪態一つでも吐いてやるのかと思ったが背後から咆哮
やっぱ硬いわあのアルマジロ

לענין ירושלים

ともかくけん制の為に数発魔力弾をぶちこんでおく。
まあこれは時間稼ぎみたいなもんだ、その間に後ろの金髪に指示を
出す。

「おい金髪、拘束系の魔法は使えるか?」

「うううん使えるよ

「お、あのアルマジロ拘束してくれ」

……わかつた！」

言ひや否や緑色の鎧がアルマジロに絡まり動きを封じる。
あれ？ ジャブ……

「なんごとよつも

連射を止め、銃に魔力を込める。

「砲撃……いや……！」

「くたばれ！！」

後ろで金髪が何か言つてゐるがそんものは知らん。

貫通力の高い徹甲弾タイプの魔力弾を発射しアルマジロを穿つ。数秒の沈黙の後、アルジロの眉間に穴が空き悲鳴のような咆哮を上げ絶命した。

「ふう……今日の食料確保」

「ええーー？これ食べるのーー？」

「そういや少し前に来た管理局の奴らも言っていたなまあ食えるものっつーとコレしか無いし食料援助とか個人的に気に食わない。」

それに……

「そのままにしたらコイツに失礼だろ？」

「失礼つて、ともかく助けてくれてありがとう……ええっと

「金髪が何かを言いたそに口をパクパクさせている。
……ああ、そういう事ね。

「クーゴ、クーゴだ」

「クーゴ……僕はユーノ、ユーノ・スクライア
改めて助けてくれてありがとう、クーゴー！」

「あ、ああ……」

「どうか、このデジャブ感は前世の記憶だったのか……
まさかこんな形で原作キャラと遭遇する事になるなんて思つても見

なかつ
た。

獲物を探していたら襲われている金髪を見つけた（後書き）

時系列とかは次話で判明します

食い物につられたのは金髪だが墓穴を掘つたのは俺だった

前回のあいすじ、美少女のよつた美少年「コーノ」を助けて恩を売ることに成功した。

ついでに食料を手に入れて、満悦だったのだが……

「ああん！？ 金が無いだあ～！？」

「「」めん…… お金は持つてきてないんだ」

正直盲点だった。

まさか魔法で転移してきたとは思つていなかつた。
てつくり宇宙船か何かで移動してきたのかと思つていたが…… 嫉妬するくらいマジ優秀

それでどうしたものかと思つていたら……

グウウ～
……

ユーノの腹が景気よく鳴り響いた。

「……ツチ、しゃーねえな」

「え？」

あつけにとつれているユーノを置き去りに獲物を担いで来た道を引き返す。

少し進んで振り向くと、ぼーっと突つ立っているユーノが見える。

「ついて来い、飯ぐらこは食わせてやるよ。

……話はそれからだ」

「え？……「うん！」

状況が理解できていないが食欲には勝てなかつたようだ。
うれしそうに俺の後を付いてくる。

クッククク……これで恩は更に売れた、仲間の所に戻つたらたんまりと報奨金を請求してやる！

あ、ちなみに獲物は魔法で軽くしている。

運搬用の魔法だけじゃつこつ色々な事に応用できるんだよねー
つーか、コイツ人を疑うつて事を知らんのか？
まあどうでも良いか、騙しやすいし。

（一十分後）

何事も無く到着、相変わらずの洞窟で安心した。
そんな短時間で変化したら困るけどね。

「「」」が俺達の住処だ」

「へえー……昔の遺跡をそのまま住処にしているのか

ユーノが壁をさわり関心したようにうなずいている。
つーかココつて遺跡だつたんだ。

とりあえずバリアジャケット解除してデバイスを待機状態にする。

「あ……クーポンで黒髪なんだ」

「ん? ああ、」の世界では黒髪が無いな

「へえー」

納得したように相槌を打ち、俺の姿をジロジロを見つめてくる。
なんか……恥ずかしんだけど。

「ま、まあともかく飯にするぜ」

「うんー。」

……「イイツ本当に男か?
なんか地味に可愛いと思つたぞ。

そんな事を思つていたら、周囲が暗くなり野太い声が聞こえてきた。

「ク一坊、びづやけじり面白に奴拾つてきやがつたな?」

「うわーーー。」

突然の事で飛び上がるクーノ

ちなみに俺はその声に聞き覚えがあるので視線をゆっくりと上げた。

「ああ、ゲンやべりうだつた?」

「べりうだつたじやねーよ、コイツは何だ?」

「そいつはユーノって言つて……」

戸惑うユーノそっちのけで俺は先ほどの経緯を説明した。
ついでに腹が減っていたので捷に従つてユーノに飯を食わせるとも
伝える。

ちなみに捷つてのは狩猟民族が結成された時からある捷で、そのひとつが『腹が空いた奴を見かけたら食わせろ』という意味がわからぬ捷だ。

ちなみに逆らうと天罰がくだらしく破つた者は居ない。
色々と言つていたが実際に神を見た俺としては天罰が怖いってのが一番の理由だつたりする。

「ふーむ、まあ大丈夫か……ユーノ君と言つたかな？」

「はつはい！」

「クー坊と協力して獲つた獲物だ、遠慮せずに食つんだぞ！」

ゲンさんはしばらく思案顔だつたが、急にぱつと笑顔になり俺の獲物を受け取つてガツハツハと大笑いしながら奥へと入つていった。

……良し、上手い具合に皿い飯にありつける。
ゲンさんの料理つて本当に皿いんだよねー

今日は原作キャラに絡んだりと運が良いな。

「……………んどうしたユーノ？」

「……………何でもないよ」

となりではポケートとゲンさんが去つた方角を見つめているコーノ。
まあ色々あつて果然としているだけじゃねーかな？

「まあ適当にすわつてろよ」

「あ、うん……おじやまします」

その後しばらくコーノと適当に雑談して時間を潰していた。
話す内容は、コーノの身の回りとか時期の確認とか、まあつまり原
作がどれくらい進んでいるのかを意識して会話してみた。
正直、原作に関わることはしたくなかった。

それなりの付き合いはしてみたが、まあそれくらいだ。
命を危険にしてまで原作に関わりたくは無い。

まあとりあえずジュークエルシードを見つけた事ぐらいしか判らなかつ
た。

時期的には無印が終わつた所かね？

たしか見つけた直後に輸送船が事故に遭つてコーノが地球に行つた
から、こんな偏狭の世界に来てるつて事は無印が終わつてちょっと
した空白期に突入したんだり。

つー事は、今後の交友で原作に絡めるかどうかだな。

そんなの面倒だし神を楽しませるだけだしふつりやけビーでも良い
んだが。

まあそんな事を思つても消されないって事は何かしら絡むことには
なるんだろうな。

「とにかく、好きな子居んの？」

「ええ！？」

ともかく色々と疑問が解決したので本題に移ろいつとゆつ。
ちなみに俺は原作のなのはとユーノの関係に疑問を持つている。
良い雰囲気だと思うんだが、何故にくつ付かないのかと常々不満に
思つていた。

なので人生の先輩としてアドバイスなんかを

まあ前世含めて彼女なんて居なかつたんだがな！ハハハ！

……ハア

とこうかこちこち反応が初々しいのつ……意地悪したくなつちまづせ

「僕、いつも図書館で調べものしたり発掘だけだつたから……」

あれ？反応が思つたより薄いな

……なんか嫌な予感がするんだけど。

無印終わつてるよね？

「おーい！飯ができたぞー！」

「お、おつー

行ひひばせゴーー！」

「あ、うんー」

地味に嫌なタイミングでゲンさんから声がかかる。

「マズイな、もしも原作手前の出来事なら大変な事になるな……

ともかく飯だ、考えるのは後回しにしよつ。

ユーノを連れて奥の部屋へと向かう。

「わあ～

「流石ゲンさんだ、うまそうだ」

「ガツハツハ！ 壊めてもなにも出んぞ」

部屋に入ると良い匂いが広がつてくる。

大きなテーブルに一人分の料理が並んでいる。

てかユーノ、お前この肉が……いや、言つのはやめておけ。

ちなみに料理はビーフシチューみたいなもんだ。

野菜は植物系の魔法生物、スープはたまに来る管理局から調味料を貰つてている。

肉は先ほどのアルマジロもどき、食つた後にネタバレしますかね。

「煮込む時間が無かつたからな、肉は焼いただけだ」

「いえ、とても美味しいです！」

「……」

ゲンさんと仲良く喋るユーノそつちのけで黙々と食べる俺。

いや、食事中つてあんま喋りたくないんよ。

しかし旨いな、たしかに肉にはあまり味がついていないが、他の野菜にはきちんと味付けされて上手い具合にバランスが取れて飽きが

来ない。

「おかわりもあるから遠慮するなよ。」

「はい。」

「んじゃ おかわり、汁多めで」

「お前は遠慮しない。」

ともかく俺とユーノはゆっくつと食事を堪能した。

「うーん、もう少しでした！ 美味しかったです！」

「おひーー！ おれしこ事言つてくれるじや あないかー！ ありがとー。」

カラカラと快活に笑いゲンさんは食器を片付けに行つた。
それを狙つて、俺は気になつていていた事を聞いてみた。

「なあ、ユーノ」

「ん？ なに？」

「やつこえぱびひつひの星に来たんだ？」

実は聞いてなかつた。

発掘が終わつた事は聞いたので、無印は済んだと思い込んでしまつた。

俺の気のせいだと、祈りながらユーノの返事を待つた。

「それは……」

俺の祈りは叶わずユーノの表情が暗くなる。

あれ？これガチでヤバくね？

「ああ、言いたくなかったら「いや、詳しく聞かせてもらひよ」

しまった……墓穴を掘ってしまった。

俺の後ろにゲンさんが居て、鋭い視線が俺達を射抜く。

「あ、う……実は……」

視線に負けたのかユーノが途切れ途切れに改めて自分の事やこの世界に来た理由を話した。

まずユーノの出身だが、これは原作と変わりなく遺跡の発掘を生業とするスクライア一族の出身だ。

ユーノに来た理由は、自らが発掘したロストロギア「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまい、

責任を感じたユーノは一人で回収を行う事にしたようだ。

そしてその一つがこの世界にもあり封印をすませて帰還する途中だつた。

……が、アルマジロもどきに襲われ、俺が助けた。

最悪な展開だ、おそらくこれは神がいじくつたせいだな。

「なんてこいつた……」

「やつちまつたなあ……クーゴ」

「え？ なに？ え？」

俺は頭を抱え落ち込み、ゲンさんは呆れたように、しかし面白そうに俺を見つめている。

ユーノはもう知らん。

まあ結論から言つと、俺は無印に関わらないといけなくなりました。

どつかの糞神様のせいでな……！

食い物につられたのは金髪だが墓穴を掘つたのは俺だった（後書き）

執筆中に原作を軽く見て絶望しました。
どうやって絡ませるか悩みましたが、無理矢理キッカケは作りました。

次話は疑問の回収と旅立ちまで一気に進めます。

時と場所を選んでふさげないと大変な事になる（前書き）

ストーリーが無理矢理かも……
あとあんまり原作を読んで無いのでキャラクター崩壊しているかも
しません
申し訳ない。

時と場所を選んでふざけないと大変な事になる

ユーノの爆弾発言の後、俺とユーノはリーダーの部屋へと連れて行かれた。

褐色の厳ついおっさんが俺達を睨みつけている。
いや、正確には睨みつけているのでは無く、普通に見ているのだが、
どう考へても睨んでいるだろあれ？

「わ！」

「ひつ！」

思わずシオニーちゃんになつちまつたぜテヘペ口
たしかこんな感じで使われていたような気がする。
あ、隣のユーノが怯えてビクビクしている。

小動物みたいで可愛いんだけど、……ツチなんで男なんだよ。
そしてその隣のゲンさんは呆れたように俺を睨んでいた。
あ、いや本気で睨んでいた。

「……クーノ、お前ふざけてるのか？」

「イエ」マッタクトンデモナイデスハイ

ゲンさん超こええ……つーか、いつの間にかクー坊つて言わなくな
つてる。

そう考へるとなんかゲンさんはお前で呼ばれるのは地味に嫌だなー

「……別に怒つていなかり樂にしなさー」

嗚呼、リーダーが優しい人でふざけていた自分を殴りたい。
まあ何回かやつたネタなんで最初以外は毎回地味に睨まれているん
だけど、今日は大目に見てくれているようだ。つーか緊張感無いな
俺。

「さてクーゴ、君は撻の事は知っているよね？」

「はい、『助けた者は最後まで面倒を見る』でしたね」

「付け加えるなら『それが知らなかつた事であつても『だ』

……誰だよこんな撻を考えた奴は？

神か！？あの糞神様なのか！？

つまり俺はまんまと神の掌の上で踊らされたつて訳か。

「あつあつークーゴは魔法生物から助けてくれたし美味しいご飯も
……だから撻には」

そんな事を考えていたらコーカノが口を挟んだ。

「だが君はジュエルシードというロストロゴギアの回収をしているや
うじゃないか」

「うつ……でも！」

必死に食い下がるコーカノ。

まあ巻き込みたくないってのが一番かな？

お優しい事で……でも、リーダーはそんなに甘くないぜ。

「一人で無謀だとは思わないのか？」

親は？仲間は？何故一人で危険な物を回収している？

「……でも……僕が……」

ユーノの声がだんだん小さくなり最後は「…………」と聞こえない
……でもリーダーの言う事は正しい。

思えばどうしてユーノは一人で行動したのだろう？

責任だけでそんな行動に移せるのだろうか？

……いや、それは俺の考えだな。

そう考えるとユーノは

「責任を感じたのは判る、だが勝手に飛び出すのはどうかな？
見たところ君はとても優秀な魔導師だと思つ
だが、あまりにも無謀すぎる！
もしも君が大きな事故に遭つて死んでしまつたらどうするんだ！？
残された者はどう思つ？
……私が言つているのはそういう事だ」

リーダーの話が終わつた後、ユーノは黙り込んでしまつた。
反省……では無いな、自分勝手な行動で迷惑を掛けたと感じている
のだろうか？

そして見ず知らずの俺にまでと……神様、アンタ最低だな。

「ともかくクーロ、君は捷に従いこの子のジュエルシード集めを手
伝いなさい」

「……はい」

「ユーノ君、色々思うところがあるかもしれないがクーロと一緒に

連れて行つてくれないか？

じゃないと捷に従い、この子を追放しなければならない

「……わかりました

搾り出すように咳くユーノ。

表情はよく見えなかつた。

「いい返事とは言えないね

まあ良い、今日はゆっくり休んで明日に備えなさい」

二ヶコリと優しい笑顔をユーノに向けるリーダー
そしてちやつかり晩御飯までご馳走するようだ。

「はい！」

その言葉にぱつと顔を上げ返事をするユーノ

少し目が潤んでいるが、その瞳には何かを決めた決意が見える。

……なら、俺も腹括るしかねーなあ！—

「や、話は終わりだ

クーゴ、君は旅の準備をしたまえ

「了解！」

部屋全体に響き渡るよつて腹から声を出し、せつあまでふせがけていた自分に喝を入れる。

「あつちよつとケーパー！」

背後からコーカスの声が聞こえるが知らん。

ととりあえず仲間達に旅に出る事を伝え、親にも伝えたら鉄拳が一発跳んできた。

右から親父、左から母なんだ。

親父は基本無口なんでも基本手から出てくる。

大事な一人息子だから……かな？

俺も捷があったとはいえるのを言えないな。
ぜつて一無事に帰つてやる。

そして夕方。

ワイワイガヤガヤと狩が成功したみたいに騒ぐ仲間達。

「おまえの中心にいのんは、」と俺

い出にはなるか。

「クーラー……あなたって子は、こんな可愛い子と旅に出るなんて」

シクシクとハンカチを濡らし、母さんが涙ながらに何か言っている。
母さん……アンタ壮絶な勘違いしているぞ？つーかアンタ酔っ払つ
てるな！？

最初に男つて説明しただろ！？

「ク……クク……その、なんだクー坊、幸せになれよガハハハ！！」

ゲンさん……撃たれたいのかね？

クー坊つて読んでくれたのは良いけど一回逝つてみるか？

「あの……僕は」

ユーノ「ゴメン。
なんかゴメン。

……たしかお風呂回あつたな、邪魔しないから楽しめ。

「……クーゴ、お前は大事な家族だ
だから無事に帰つて来い」

なんか親父が喋つたんですけどー！？
地味に怖ええ……

「親父……」

「これは餓別だ」

親父はそう言つて俺のリュックに軽く触れる。
すると淡い光が溢れ、何かが流れ込んできた。

「これは？」

「俺が編み出した魔法よ
使えるかどうかはお前次第だ」

フツと笑い酒を飲み干し親父は自分の部屋へと帰つていった。
ありがとう、親父。

「なんだクー坊、親父から餞別貰つたのか？」

「ゲンさん……」

散々ユーノをいじり倒したのか、スッキリした表情でゲンさんが俺の隣へ座つた。
しばらく何も言わず酒飲んだり飯を食つていたが、何か踏ん切りがついたのだろうか？

「ん！」

顔は真つ直ぐ前を見て、俺に腕だけ突き出した。
掌には十発の薬莢が乗せられており、俺がそれを受け取るとカラッと金属的な音を奏でた。

「これは？」

「俺からの餞別だ、ピンチになつたら使え」

そう言つたらゲンさんも自分の部屋へと戻つていった。
よくよく回りを見てみると、仲間の姿は無く俺とユーノそして母さ

んだけが残された。

ユーノはユーノで仲間達から応援されたり肉が入った包みを渡されたりしていた。

あの肉ってアルマジロもどきの肉だよな？

どつ食べと？

まあともかくユーノには笑顔が溢れていたので良し。
ちなみに俺はノーマルだから別にユーノなんて気にしないし
バインボインの女の子にしか興味ないし

……先ほどのシリアスが台無しである。

おや、母さんがこっちに来た。

今度は何だりづ？

「クーゴ」

「ん？ なに？ かあわっふ……」

俺は母さんに抱きしめられた。

特に掛ける言葉は無く、じばらぐぎゅっと抱きしめていた。

そして無言で親父の部屋に戻った。

「……」

「「ゴメン……僕を助けたばかりに……イタツ……」

なんか隣に来てぶつづけてくる小動物をはたく。

「なにすんだよーー」

「捷だけで俺がお前の手伝いをすると思つたか?」

「……え?違ひの?」

「ひつ……なんだその怯えたような気持ち悪いものを見る田はー?」

「なんつーかな、ビツヒツして良このかわからんナビセ

「……」

「困つたらお互ひ様つて事だ

理由を聞いてそのまま放置して事故に遭つたりしたら後味悪いしな

「僕はそんな事ないよー」

「はこダウトー

毎に助けられたのは何処のビツヒツだしたー?」

「うう……それは

言葉に詰まるのコーカを無視して、手を突き出す。

「まあそういう事だからさ、これからアロシクー!」

「……ひさ」

おつかなびつくり俺の手を握りユーノははにかみながら答えた。
それが俺とユーノとの出会いであり、俺が原作に突入した瞬間でも
あつた。

時と場所を選んでふさがないと大変な事になる（後書き）

休日が終わったので、しばらく投稿期間が長めになるかもしません。

次話から原作入ります。

主人公設定その？（前書き）

無印開始直前の主人公のステータスでも晒します。
次話から無印編開始です。

主人公設定その？

名前：クーゴ

年齢：12歳

魔力光：紅褐色

魔力：推定B

偏狭惑星に住む狩獵民族の一人

早い段階から独り立ちし仲間達と共に狩に出てるのでそこそこの実力はある。

しかし、魔力的な知識は我流に近いので、まだまだ未熟な部分が多い。

神様が勝手に決めた特典は死ぬ前に見ていたガン×ソードと砂ぼうずなのだが詳細は不明。

現在判明している特典は砂ぼうずの装備と砂に潜れる能力のみ。

また、砂ぼうずの主人公である「水野灌太」の性格をベースにしている為か、勝つ為や生き残る為には手段を選ばない、そして女性に弱い。

戦闘技能などは両作品から受け継いでいるらしく、特に射撃の腕前はメキメキと上達している。

現在の装備

多数のストレージデバイスを装備しているが、攻撃系のデバイスは

一つ

バリアジャケットは野戦服（見た目はまんま砂ぼうず）
狩猟民族共通の装備なのでクーゴ専用とは言えない。

銃型デバイス（名称無し）

形はワインチエスター M1897

発射方法は通常のショットガンと同じ
威力は込める魔力に比例して上昇する

魔法弾の種類は二種類、クーゴの意思で切り替えが可能
種類は命中率が高い拡散型の散弾と威力が高い貫通型の徹甲弾

徹甲弾タイプは消費魔力が高く発動までに時間が掛かるが飛距離は
長い
散弾タイプは発動時間が短く連射可能だが飛距離は短い

徹甲弾タイプの威力は散弾タイプ四発分（散弾がすべて命中した場合）

ゲンさんから手渡された十発の弾丸は今のところ能力不明

索敵用デバイス「零式ヘルメット」

砂ぼうずが装備しているヘルメットと同じ

各種センサーが豊富で情報戦に長けるが、主人公はあまり使い慣れてない

他の登場人物にかぶらせる事も可能

対魔力防御マント

おそらくガンソードから唯一の特典（というか砂ぼうずにもマントはあるので詳細は不明）

最大五発までの魔力系ダメージを防げる

クロスボーンガンダムのABCマントのようなものしかし砲撃系などは防げない

約一日を掛けて修復可能。

リュックサック型デバイス「ロケットウインチ」

空中移動用のデバイス

ワイヤーに取り付けられたフックを空中に飛ばして任意の場所に固定できる

ワイヤーを巻き取る力を利用して跳ぶ事が可能

燃費は良いはずだが使い慣れていないので非常に悪い

飛ばす方向は上方と左右と切り替え可能

また、待機形態は深緑のリュックサックになり他のデバイスもこれに搭載される

銃型デバイスはキー ホルダーになり単体で使用可能

主人公設定その？（後書き）

まったく関係ないけど主人公なのに地味ですね。

だ が そ れ が い い

お元気は大好きだがアクシトントは邪魔だから帰ってくれ（前書き）

思つたよつ早く書けました。
無印開始します。

『居は大好きだがアクシトントは邪魔だから帰ってくれ

第97管理外世界……通称『地球』

コーノ曰く、この世界に多くのジユエルシードが漂流しているらしい。

なんとなく懐かしい感じがするのはおわり前世の記憶のせいかな？

記憶が曖昧なのは幸いだけど、とりあえず初見つて感じに振舞うか。うーむ、ボロが出ない程度に喋るのいつひよつと緊張するな……

「植物の惑星か？異常に青臭いな……」

「いや、少し調べたんだけビ文明的には発達してこねりじよ」

「ふーん……つー事は、適当に歩けば村に着くのかね？」

「クーゴ、君は色々勘違いしているよ~」

呆れたように、コーノは地球について懇切丁寧に説明してくれた。演技なんてした事が無かったけど、案外上手くいくもんだな。

といつも転移する前にこの世界の事は予習してるのでコーノ
マジ優等生。

いつも言葉を選ばないと厄介な事になりやつ。

まあそのありがたーい説明は適当に流したがな。

そして頃合を見計らつて話を区切り、適当に見回りひとつ提案する。
ククク……我ながら上手い具合に事が進んでいるじゃないか。
これなら案外楽にジユエルシード集めができるかもしね。

とまあそのような思案を巡らせつつ周囲を探索していくうちに、

つとした疑問が浮かんだ。

「そういうや俺達の服装はどうなんだ？」

不振に思われるはなるべく避けたいんだけど

前世の記憶があるとはいえる服装などはほとんど記憶に無い。覚えている記憶も曖昧で、よくもまあ転生者だと言えるなと思えるくらいだ。

ちなみに地球に関して覚えている記憶は、大まかな所でいつと、ビルが立ち並ぶ町がある、車がある、学校などの公共施設があるなど基本的な事ぐらいだ。

細やかな記憶は他にもあるが、正直言つてまったく役に立たない記憶である。

「うーん……クーノは大丈夫じゃないかな？」

俺の服装を上から下までじっくり見てクーノが答えた。

ちなみに俺の服装は深緑の作業着。

大きなリュックを背負つてるので、遠目に見れば何かの作業員かな？

……という印象が持てれば幸いである。

ちなみにユーノはどうからどう見ても異世界人。

町を歩くと普通に補導されるレベル。

あ、いやそっち系の人たちに囮まれるかもね。

「という事はユーノはしばらく出歩けないな
稼いでから服買つか？」

「あ、それは大丈夫だよ」

……「うんまあ知つてた。

だが疑問を述べる事によつて円滑な人間関係を構築するものだ。

「どう」とへ

「僕、変身魔法を使えるんだ」

得意満面な顔で答えやがつた。

効果音はもちろん、どやあ

糞がつ！…案外可愛いとか思つちまつたじゃねーか…！
なにこの小動物！？

「……お前、なんでそんなに嫉妬するくらい優秀なんだよ

「やつそつかな」

「ぐつ……まつまあ、それならひとまず安心だな」

照れ隠しに適当に言つたら照れられた。なんか殴りたくなる。
つーか何を根拠に安心なのだろうかね俺？

しかしこれからどうすれば良いんだ？

普通に考えればもつ少しで主人公のなのはとの遭遇だが……

「

……その時だつた。

背中を撫でるような、何か嫌な気配が俺達の周囲に満ちた。

「なんだ！？」

「「れは……ジユニルシード……」

「きなりかよ！？」

この世界に来て数時間くらいしか経つてないぞ？

ところが何かの気配がじつに近付いて来ているようだ。

「おじおじ……」ひりひり来てるやー。」

「ジユニルシードは、生物の強い思いに反応するんだ」

軽い説明をしてくれてるけど闇を流してバリアジャケットを展開する。

ショットガンを構えた時には説明が終わっていた。

「メン全然聞いてなかつた。

つーか昨日の夜に説明しろや。

ともかく原作と同様に強い思いを具現化せらるビッククリアアイテムつてところか。

発動したら生物を襲うとかはた迷惑な話しだな。

「来る……」

ユーノが叫んだ瞬間、正面の茂みを搔き分けスライムのよつねドロドロの物体が出てきた。

先手必勝とばかりに魔力弾をぶち込むも穴が空くだけで効いていない。

「クソッ 効かねえ！！」

「魔法じや駄目だ！」のテバイスで封印しないと！」

「すよねー。

仕方ねえ、詠唱を邪魔されないように囮になるか。

更に銃を乱射しながら森の奥へと移動してスライムの注意をこつちに向ける。

「ちょっとクーポーーー！」

「おらおらーこつちだ化け物！！！」

【ユーノ、今のうちだ！】

「！！！」

【わかつた！ー】

俺の意図が判つたのか、ユーノはその場で詠唱を始める。

俺はスライムの猛攻を避けながら魔力弾をぶち込み時間を稼ぐ。

『妙なる響き、光となれ』

接近されると何もできないのでウインチを飛ばし、無理矢理距離を取つて徹甲弾タイプをぶち込む。

大穴が開くがそれだけ、いや、飛び散った肉片？が俺に向かってくる

「ちーーー！」

『赦されざる者を、封印の輪に』

咄嗟にマントで防いだが、たった一回で数箇所破れてしまった。
つーかどんだけ強いんだよあの攻撃……これ俺の徹甲弾でも五発くらい耐えるんだぞ！？

「！？」

スライムがビクンと跳ねる。

どうやら気が付いたな、だがもう遅い手遅れだ。

『ジユエルシードー！』

いつの間にやらスライムの背後に接近したユーノが右手を振りかぶっていた。

殴つたら封印つてどんな魔法やねん……

『封・い！？』

「なに！？」

しかしユーノの攻撃は、突如飛来した物体に阻まれた。

盾……いや、違う！

スライムを覆つように板状の物体が浮遊している。

「なんだありや！？」

「僕が聞きたいよ！？」

身の危険を感じたのか、ユーノはその場から飛び退き、俺と合流する。

板状の物体は回転しながらスライムにくつ付いて、何かを形成している。

更に森の奥から部品のような物が飛び出しどんどん大きくなる。

「何か知らんがヤバイって事は確かだな！！」

合体中は攻撃してはいけないのは勇者口ボだけの話だ。
敵メカの合体に便乗するほど俺は優しくはない。

俺は銃を構え最大威力の徹甲弾を発射した。

……が、スライムに近付くにつれて弾丸の光が弱くなり、装甲に当たる頃にはカツンと弱弱しい音だけが虚しく響いた。

「はあ！？」

「魔力をかき消した……？」

ユーノは呆然と呟く中、俺は素つ頓狂な声を上げてしまった。
なにせその現象には、前世で見覚えがあつたからだ。

「…………！」

そしてスライムも合体が完了してしまったようだ。
駆動音を響かせ、俺達に機械的な咆哮を上げる。

「おじおじ……マジかよ……」

「……」

俺は半分夢でも見て いるのかと思つてしまつた。

隣に居るコーノは、ただ呆然と田の前の光景を見つめている。

巨大な球体の身体

球体上部からは黒い腕のようなものが突き出でている。

球体下部には身体を支えるのだろうか？

赤いコードが無数に生えて自身を支えている。

そして極めつけは黄色く輝く三つ田のレンズ。

「*Strikers*」に出てきたガジュット三型が俺達の田の前に存在していた。

お#居は大好きだがアクションは邪魔だから帰ってくれ（後書き）

軽く原作崩壊させてこきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0844ba/>

リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

2012年1月5日23時48分発行